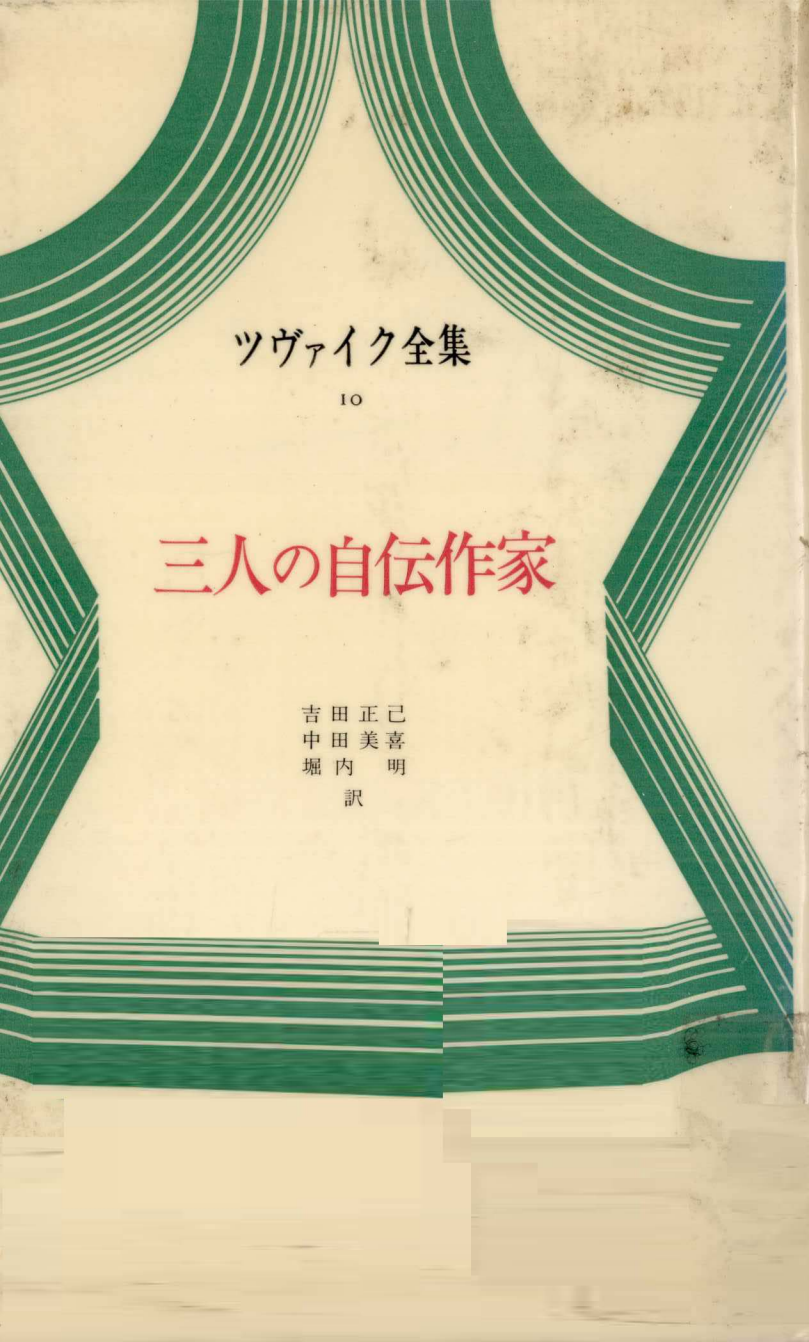




ツヴァイク全集

10

三人の自伝作家

吉田正己
中田美喜
堀内明
訳

三人の自伝作家

吉田正己
中田美喜 訳
堀内 明



みすず書房

ツヴァイク全集 10
三人の自伝作家

吉田正己
中田美喜
堀内 明
共訳

1974 年 8 月 30 日 印刷
1974 年 9 月 10 日 発行

発行者 北野民夫

発行所 株式会社 みすず書房 〒113 東京都文京区本郷 3 丁目 17-15
電話 東京 (03) 814-0131 (代表) 振替 東京 195132

本文印刷所 理想社印刷所

扉・カバー・表紙印刷所 栗田印刷

口絵印刷所 京美印刷

製本所 鈴木製本所

© 1974 in Japan by Misuzu Shobo

Printed in Japan

書籍コード 0397-00101-8005

落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

カザノヴァ・・・・・・・・・・・・・・・・	7
はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・	9
若いカザノヴァの姿・・・・・・・・	17
ペテン師たち・・・・・・・・・・	25
教養と才能・・・・・・・・・・	34
皮相の哲学・・・・・・・・・・	44
ホモ・エロティクス・・・・・・・・	61
暗い歳月・・・・・・・・・・	85
老いたカザノヴァの姿・・・・・・・・	97
自伝の天才・・・・・・・・・・	109
スタンダール・・・・・・・・・・	123
嘘をつく喜びと真実への愛・・・・・・・・	125

肖像	131
生涯のフィルム	137
一つの自我と世界	175
芸術家	196
心理学の快楽	215
自己叙述	222
現在に生きる姿	236
トルストイ	241
予響	243
肖像	248
生命力と反撃	255
芸術家	273
自己描写	291
危機と変転	301
人工のキリスト教徒	310

教理とその矛盾	321
実現への戦い	344
トルストイの生涯からの一日	363
決意と浄化	379
神への逃走	387
残響	393
年譜	397
解説	403

精神世界の建築家たち（Ⅲ）

三人の自伝作家

カザノヴァ・スタンダール・トルストイ

カ
ザ
ノ
ヴ
ァ

吉
田
正
己
訳

彼（カザノヴァ）はわたしに語った。自分は
自由人だ、世界市民だ、と。

一七六〇年六月二十一日、アルブレヒト・
フォン・ハラーにあてたムラルトの手紙

はじめに

カザノヴァは世界文学のなかに、例外として、他に類を見ない成功例として登場している。というのは、何よりも、この高名ないかさ、ま師は、ポンテ・イウス（ポンテ・イウス・ピラートウス、ローマからユダヤに派遣された知事、イエスに死刑を下す）が「信仰告白書」に名をとどめているのとまったく同様に、不当にも、創造的精神の万神殿にまつりあげられているからである。つまり、彼の詩人としての栄誉は、図々しくもアルファベットをでたために並べてつくったド・サンガルトなどという騎士の称号に劣らないほど、うちもないしろものである。彼のいくつかの詩は、ベッドから賭博台へ行くあいだで、どこぞの御婦人のために、即興でさらさらっと作ったものだから、麝香と、書物のにかわのいりまじった妙な匂いがするのだ。わが親愛なるジャーコモ君（カザノヴァ、一七二五—一七九八年、呼び名ジョヴァンニ・ジャーコモ、自ら騎士ド・サンガルトと名のる）が哲学しはじめたら、みんなは、あくびをこらえるために、あごの骨をくいしばった方がよろしい。カザノヴァなどという名は、『ゴータ版系図年鑑』にのってもないし、詩人としての高い栄誉を担っているわけでもない。それどころか、詩人の領域においても同様に、寄生虫的存在だし、何の権利も地位もたない侵入者なのだ。ところで、彼は、役者のけちなこせがれで、破戒坊主で、くびになった軍人

で、いかさま賭博師のくせに、皇帝や国王のもとに出入りし、とどのつまりは、最後の貴族と呼ばれるド・リーニユ公〔シャルル・ジョゼフ、一七三五—一八一四年、ベルギーに生まれたオーストリアの將軍、フリードリヒ大王、ルソー、ゲーテ等との文通で知られる〕の腕に抱かれて死んだわけだが、彼はこのように、図々しく一生をおしわたただけでなく、のちのちまでも彼の影が、ふらふらさまよいながら、しゃあしゃあと不滅の人物に仲間入りしてしまったのだ。もっとも、一見ただけでは、とるに足らない文人で、おおぜいのなかの一人として、時代の旋風にもあそばされる仄にすぎないとしか見えなかったけれども……。

ところで、事実とは異なるものである。この彼ではなくて、彼の著名な同国人たち、アルカディア〔幸福な国の意、當時のイタリヤの詩派〕の崇高な詩人たち、「神聖な」メタスタージオ〔一六九八—一七八二〕や高貴なパリーニ〔一七二九—一七九二〕など、ほかの連中たちこそ、図書館の紙くずに、文献学者のあさるねたになりはててしまった。それなのに、彼の名は、尊敬をこめた微笑につつまれて、今日でもあらゆる人々の口にのぼっている。『解放されたエルサレム』や『忠実な牧人』が貴重な古本として、読まれもせずに、長いこと本棚で埃をかぶったとしても、この世のあるかぎりはおそらく、彼の書いた好色イリアスは、ずっと生命をもち続けて、熱心な読者を見いだすであろう。こうして、この狡猾な賭博師は、ダンテ、ボッカチオ以来のあらゆるイタリヤ詩人たちを、軽くないなしたことになる。もっと奇妙なことに、カザノヴァは、それほど莫大な勝ち星をあげていながら、一文も金を賭けていないのだ。彼は不滅になるための代償を、いささかも払っていない。この賭博師は、真の

芸術家に課された、いわくいいがたい責任など、考えてもみない。夜の目も寝ずに、また、ひるはひるで一日中、ことばの推敲に骨身をけずったすえ、やっとのことで、意味が、きれいな虹のように、ことばのレンズを通じて輝きを放つものだ、などという苦しい体験を、彼はもたない。

また彼は、四苦八苦しながらも、人目につかず、何十年も経ってやっと認められるような、恵まれない詩人の労苦など、ひとつも知ってはいないし、実生活のあたたかみや豊かさに対する英雄的なあきらめなどとは、縁なき衆生であった。彼カザノヴァは、いつも人生を軽々とわたっていた（どういうふうにわたったかは、神のみぞ知るだ）。彼は、きびしい女神「不滅」のために、わずかな喜びも、ひとかけらの楽しみも、ひとときの眠りさえも犠牲になどしなかった。名声を得ようとして、指一本動かしたこともないのに、この幸運児には、名声の方が向うからこるがっているのだったら、彼は本気になって自分の指をインキで染めることなど、毛頭考えない。いたるところでしめ出しをくい、女たちからもの笑いにされ、孤独で尾羽うち枯らし、性的不能になってからはじめて、気むずかしい、みじめな老人になってはじめて、彼は、体験の代用物としての仕事に逃げ道を見つけた。楽しみを失ない退屈まぎれに、まるで歯のぬけたかいせんだらけの野良犬みたいに、むずがゆさにいらだちながら、ぐちっぽくなつた彼が、一生を終つたも同然のカザノウス・カザノヴァ〔カザノウスは死後あやまりにつづられた名前、後章参照〕という七十歳の老人に向つて、自分自身の生涯を語り

はじめたといつてよい。つまり、自分に自分の生涯を物語るのだ。これが彼の文学的業績のすべてである。とはいつても、それは何とすばらしい生涯だろう！ それは、五つの小説、二〇の喜劇、五ダースの短篇や挿話に優に匹敵している。魅力あふれる場面や逸話が、熟しきつたぶどうの房みたい、枝もたわわに実っているようなもので、それを圧搾して、ほとばしり出た流れが、この一回限りの生涯を形づくっている。ここに見られる生涯は、芸術家や作家の筆を加えなくても、それ自体すでに、完成した芸術品として充実完結しているのだ。こうして、はじめこそわけがわからなかったが、いまや、彼の名声の秘密は、きわめてなつとくのいくしかたで、解きほぐされるのだ。つまり、カザノヴァの天才を示すのは、彼が自分の生涯をどのように書き伝えたか、ではなくて、彼がいかに自分の生活を生きたか、という点だからである。ほかの人だったら創作しなければいけないことを、彼は楽々と呼吸しながら感じとってしまう。他人が精神で形成するものを、彼は欲望に燃える肉体でつくりあげる。だから、彼のばあい、ペンと空想とが、現実をあとから飾りたてながら、何かとでっちあげる必要はない。それ自体すでに劇的につくりあげられている生涯にあつては、ペンと空想は、ただトレーシング・ペーパーの役を果すだけで十分である。同時代のどの詩人も、カザノヴァが体験したほどに、さまざまなヴァリエーションやシチュエーションを考え出しはしなかった。それに、現実の生活の歩みが、これほど大胆なカーヴを描きながら、十八世紀全体をつらぬいた例もないのである。ただ事実内容（精神的本質とか、

認識の深さではない）だけについて、たとえばゲーテ、ジャン・ジャック・ルソー、その他同時代人の伝記と、彼の伝記とを比較してみるがよい。これらの人たちの生涯は、目的追求の創造的意志に支配されているが、このペテン師の流動的で、自然そのものの生涯にくらべると、何と變化に乏しく、空間がせまくなるしく、つきあう範囲が田舎くさく見えることであらう。カザノヴァは、国や町、自分や職業、環境や女たちを、まるで下着みたいに、しょっちゅうとりかえてしまふのだ。彼が創作の点でしろ、とだとすると、上述の人たちはみんな、享樂に関しては、しろ、とだといえる。実は、この点が精神的人間の永遠の悲劇である。つまり、ほかならぬ精神的人間こそ、生活のあらゆるひろがりと快樂を知りつくす使命と願いをもちながらも、自分の使命にしばられてしまうからだ。自分に課した義務のために自由を失い、秩序と大地に束縛されて、自分の得意な領域でかえって奴隷にされてしまう。眞の芸術家はだれしも、自分の生活の大半を、自分と自分の創造物とのあいだの決闘によって、孤独のうちに過してしまふ。まのあたりの現實に完全に身をまかせるような、自由で浪費的で、非創造的な人間だけが、純粋な享樂者になりうるのだ。こういう人間こそ、人生のために人生を生きているのである。ところが、自分に目的を課する人は、偶然というものを見おとしている。だから、どんな芸術家でも、大ていば、自分が體驗しそこなったことしか、創作しないのである。

ところで、芸術家タイプと反対の、だらしない享樂者には、さまざまな體驗に形を与えうるだ

けの力がいつも欠けている。彼らは瞬間瞬間のなかに自己を見失ってしまう。それによって、この瞬間は、ほかのすべての人にとっても失われたものになる。ところが、芸術家は、ほんのわずかの体験でも永遠化するすべを知っているのだ。したがって、この両端は、たがいに効果的に補いあうどころか、はなればなれになったままになる。一方には酒がないし、他方には盃がないのだ。いかんともしがたい逆説だが、行動人で享樂者だったら、あらゆる詩人以上に体験を語れるはずなのに、その能力をもっていない。また、創作者となると、もの語るに足るだけの出来事を体験していることがまれなので、詩的創造をしないわけにいかなくなるのだ。詩人が伝記にうってつけの生涯を送ることはきわめて珍しいが、真に伝記にふさわしい人物で、自分の伝記を書く能力のある人もめったにいないものである。

したがって、カザノヴァこそは、すばらしい、ほとんど唯一の成功例と見なされるのだ。情熱的享樂者が、ついに自分の波瀾万丈の生涯について語ったからだ。つまり、瞬間瞬間をあくことなくむさぼるタイプのこの男は、その生涯を、道徳的にとりつくりいもせず、詩的に美化もせず、哲学的に粉飾もしないで、きわめて客観的に、まったくありのままに語っている。いいかえればその生涯は、情熱的で、危険で、墮落しており、でたらめだが、興味津々たるものがあり、卑劣で、いかがわしく、あつかましくて、ふしだらではあるが、しかしいつも、意想外のことが連続して、手に汗を握らせるのだ。なおその上、彼がその生涯を語るのは、文学的野心や、いい気に